

抄 録

第18回群馬県小児感染免疫研究会

日 時：平成 27 年 7 月 2 日 (木) 18:45~20:30

会 場：群馬ロイヤルホテル 2 階「鳳凰の間」

共 催：群馬県小児感染免疫研究会・群馬県医師会・Meiji Seika ファルマ株式会社

〈一般演題〉

座長：富田 治芳 (群馬大院・医・細菌学)

1. 小児の深頸部感染症症例と川崎病症例

高橋 秀行, 高橋 克昌, 近松 一朗

(群馬大院・医・耳鼻咽喉科・頭頸部外科学)

咽後膿瘍は乳幼児に好発する感染症であり, 感染が口腔・咽頭・喉頭より咽後間隙に波及し時に重篤化する. 一方で川崎病も乳幼児に好発する急性熱性疾患であり, 全身の血管炎に起因する多彩な臨床症状を呈し感染症との鑑別に苦慮する場合も少なくない. 今回我々は類似する症状所見で発症した小児の咽後膿瘍症例と川崎病症例を経験したので報告する.

症例 1 は 3 歳男児. 発熱・咽頭痛・頸部腫脹を主訴に来院. 採血で炎症反応高値, CT で咽後間隙から縦隔に及ぶ広範な腫脹・一部 ring enhance される低吸収域・頸部リンパ節腫脹を認め咽後膿瘍と診断した. 抗生剤加療で改善傾向を認めたが, 副咽頭間隙に膿瘍の残存を認めたため全身麻酔下に切開排膿術を行い軽快した. 症例 2 は 5 歳男児. 発熱・咽頭痛・頸部腫脹を主訴に他院へ受診, 採血で炎症反応高値, CT で咽後部に一部低吸収域を伴う腫脹と頸部リンパ節腫脹を認め咽後膿瘍と診断, 抗生剤加療を 3 日間行うも改善を認めず当院へ転院となった. 転院翌日にいちご舌・口唇発赤, 結膜充血が出現し不全型川崎病と診断, アスピリン・γグロブリンを開始したところ急速に改善傾向となり心血管障害の合併も認めなかった.

今回の 2 症例は極めて類似した症状で発症したが, 症例 1 は低吸収域の一部で ring enhancement を伴い抗生剤が有効であったのに対し, 症例 2 は低吸収域が不均一で被包化されておらず抗生剤は無効であった. こうした相違点は咽後膿瘍と咽後部腫脹を伴う川崎病との鑑別に有用であることが示唆された.

2. 群馬大学の医学部新入生と留学生のクオンティフェロン陽性率について

木村 孝穂¹, 徳江 豊², 村上 正巳¹

(1 群馬大院・医・臨床検査医学)

(2 群馬大医・附属病院・感染制御部)

【背景と目的】 群馬大学では病院実習や研究活動を行う医学部の学生や留学生を対象に結核感染の有無を調べる目的で, 2009 年度よりツベルクリン検査に代えてクオンティフェロン (QFT) 検査を実施している. QFT 陽性者には医療機関を紹介し, 問診, 診察, レントゲン, CT 等の検査の検査を実施し治療の必要性につき検討し, 経過観察を続けている. 【結果】 1. 新入生 1,730 名中 5 名が QFT 陽性で, いずれも結核患者との接触歴は確認できず, 未治療で経過観察を続けているが, 発症者はない. 2. 留学生 636 人中 57 人が陽性, 2 名が既感染で治療済, 2 名が活動性結核, 8 名が潜在性結核として治療を受けた. QFT 陽性率は群馬大学の新入生 0.3% に対し, 留学生 9% と高値であった. 留学生の出身国は 90% 以上が結核高頻度発症国であった. 【考察】 医学部の学生は病院実習前の基礎値を得る目的で, QFT 検査を継続すべきである. 留学生は結核高頻度発症国出身者が多く, 結核発症を抑えるため QFT 検査を継続するべきである.

〈特別講演〉

座長：荒川 浩一 (群馬大院・医・小児科学)

ワクチンの重要性とその限界

そして年齢と耐性菌の現状を考慮した抗菌薬の選択

津村 直幹 (久留米大学医学部小児科学講座)